

第58回動物愛護の作文コンテストで

本校生徒が受賞しました

公益社団法人日本動物福祉協会主催の、動物愛護週間中央行事の一環として行われた、第58回動物愛護の作文コンテストにおいて、本校の中学1年生の生徒のうち1名が「一般社団法人昭和会館賞」、もう1名が「日本動物福祉協会二等賞」を見事、受賞致しました。

2人とも、夏に実施された中学1年の宿泊行事であるHR研修のプログラムの1つ、牧場体験を通じて感じたことを、中学生のみずみずしい感性で表現しました。以下、昭和会館賞受賞者の作品をご紹介します。

私達の毎日の生活の中で動物の肉を食べる日は週何日程あるだろうか。毎日だけでなく四日は食べていると思う。私達日本人が主に食料とする牛肉、鶏肉、豚肉はどれも人気であり、私も大好きだ。思い返してみれば私達が毎日、おいしく食べている肉は元々家畜で飼われていた動物だった。

私は今年、学校の行事である白樺湖HR研修に行った。そこでは様々な初めての体験をした。その中で牧場に行ってソーセージ作りをする、というものがあつた。私がいつも、お弁当などで食べているソーセージは豚肉だったが、今回作るのは牛肉のソーセージだった。自分の席についた時に目の前に血と牛肉と一緒に入っているビニル袋がおいてあり。それを見た私はこれを素手で触って食べるのか、作りたくないな、と思った。作り方の説明の時に担当者の人が言っていた。

「この牛肉はこの前まであそこの小屋にいた、僕も、他の人達もみんな、顔も性格も知っている牛さんのお肉です。嘘ではありません。本当です。だからみなさん、今から感謝の気持ちを込めて、おいしく作っておいしく食べてください。」

この言葉を聞いた時、何かが心につきささつた。その後、数秒最初は触りたくないと思った肉をみつめてしまった。気持ちが六十度くらい傾いた気がした。班のみんなと作る時、ムダ話をしている人は誰一人としていなかった。みんな私と同じ気持ちだったのだろう。作り終わった後も部屋には変な、慣れないにおいがただよっていた。出来上がった、自分達が作った牛肉のソーセージをポトフと一緒にいただいた。味がなかったわけではないが、複雑な心境で何も感じられなかった。ただただあの最初に血と肉を見たときに思った事を申しわけなく思うことしかできなかった。

この初めての体験をきっかけに私の何かが変わったと思う。あの時、ソーセージを作っている時、どういう気持ちだったかは思い出せない。今、自分のいる牧場の牛の肉が目の前にあると言われると胸が痛む。しかし、いつも食べている肉は、どこでどのようにして自分のお皿の中にあるのかが分からない。そのため、それほど生きていた命をいただく、という実感がわからない。それがかわらぬ現実だった。

「いただきます。ごちそうさまでした。」

私はこれらを、これからいただく命へのあいさつと、いただいた感謝の気持ちを伝えるあいさつだと考える。毎日、たくさんの畜産動物が屠殺されている。人間に買われて料理になっても残されて捨てられる、というケースもある。食べ物を残してしまうことは仕方がない時があるので、食事前と後のあいさつだけでもしっかりと気持ちを込めてしなければいけない。

今の時代、私達は毎日のように命をいただいている、という実感がわかずにいる人が増えている。畜産動物をはじめとするたくさんの命の大切さを実感するために、今回の私のような体験に多くの人に足を運んでもらいたい。

